

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
 (Tell) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

大学図書館問題研究会・京都支部主催

第2回 大学図書館員京都研究集会

日時 12月4日(土) 午後2時～5時まで

会場 立命館大学末川記念会館 第1会議室

内容 教科書の歴史とその所在を求めて

海外における出版物価格の高騰と図書館の対応 —米国の事例を中心として—

立命館大学外国雑誌コンテンツ検索システムについて
 (デモンストレーションあり)

図書館を取り巻く情勢には依然厳しいものがあります。打開の道は、図書館員の努力において他にありません。その原点は、あらゆるツールを駆使し、資料提供をいかに迅速かつ的確に行なうかを実践し続けることでしょう。それが利用者との信頼関係を限りなく深め、情勢を打開する切札となるのです。

京都支部では会員間の相互触発を期して、昨年度に続き研究集会を下記の通り実施します。忙しいからこそ、発想の転換、活性化が必要なのです。一人でも多くの皆さんの参加を期待しています。

目次	図書館スペース拡大策としての増築について (村上美代治) …… 2頁
	京都支部事務局体制決まる …… 6頁

図書館スペース拡大策としての増築について — 龍谷大学深草図書館の増築報告 —

村上美代治 (龍谷大学経済学部事務室)

1. はじめに

ここ数年、図書館界では資料の加速度的な増加、多様化に伴い図書館の狭隘化が大きな関心事となってきた。同時に、新館を建設する動きも見受けられるが、これらの図書館はもともと規模が小さく、本格的な図書館(単独館であろうと、併設館であろうと)として脱皮するために建設されたものが中心である。それ故に、図書館の建て替えが本格的に進行していると断定することはできないだろう。実際、中・大規模館建設のケースは一部の例外を除いて、移転を契機にしたものや分館の新たな設置に伴って行われているのが現実ではないだろうか。従って、図書館界の課題は依然として未解決の状態にあると言えよう。

では、一体図書館の狭隘化に伴う環境悪化や利用サービスの悪化に対してどの様に対処されているのだろうか。大多数の大学図書館では、図書館環境の悪化という事態に直面しているものの、大学の施設計画における優先度の低さや長期計画策定における図書館の重要性の低さとの関わり(戦略計画における図書館の位置づけの低さ)、財政問題、キャンパスの狭さにより新築はもとより増築も儘ならぬのが現実であり、主として館内での受動的で暫定的な策でもって館員個人の努力に負っているのが実情である。本誌においても、66号(1990.6)、91号(1992.9)で「狭くて危険な書庫」(池田千恵/京都大学文学部図書室)、「書庫問題の現状と対策」(大館和郎/京都学園大学図書館)として現状が紹介されているし、「アエラ」においても特集「大学図書館は知識の棺桶」(1992.2.4)が生まれ、社会的に大きな反響を呼んだ。しかしながら、国立大学では特別会計予算が計上され出したが、基本的には未だ遅々として対策が構じられていないし、私立大学においても国庫助成の実質的な減額のなかで、根本的な打開策は取られていない。少し古いデータではあるが、日本私立大学協会の『私立大学図書館における資料の収集、保存・管理、除籍の現状に関する実態調査報告書』(1989年)によれば、アンケートに回答を寄せてきた193大学231図書館のなかで、「5年以内に満杯」「余裕なし」が189館(82.5%)にも上っていることが判明している。しかしながら、施設設備の更新や利用者環境の充実のために何らかの解決策を要するならば、今迄あまり重視されてこなかった「増築」というスペース拡大策にもっと焦点を当てるべきであり、自館の増築報告をも兼ねてその根拠をも述べたい。

2. 図書館の年代別竣工実態

ところで、図書館の建物のソフト面での寿命は何にもとづいているのだろうか。法的基準による規制を除いて検討すれば、主として利用者との関係、資料(情報)との関係、情報・科学技術との関係が主たる要因として考えられるが、このことは結果として図書館の老朽進行具合につながる。図書館の老朽がどの程度進行しているかという問題は、図書

1990年までの5年間毎の竣工図書館数

館の竣工時期との関係で把握できる。昨年の全国大会第7分科会：図書館施設において提出された三瓶邦彦氏の「大学図書館竣工年代別集計」（データは図書館年間1992年版による）をもとに本稿の目的に合わせて作成した。右表の通り、いまだ1965年以前に竣工された図書館が160館もあること、さらに本館についても108館もあることであり、建物自体の老朽化が進行していることが判明できる。ただし、この場合図書館竣工から現在までの経過年数に基づいての印象であり、実際に管理運営や奉

竣工年	国公立 大学 図書館	私立 大学 図書館	全 体	
				本 館
～1965年	86	74	160	108
1966～70年	66	79	145	116
1971～75年	56	69	125	114
1976～80年	54	91	145	115
1981～85年	50	85	135	114
1986～90年	34	102	136	127
合 計	346	489	835	680
1966～90年	260	426	686	586
合計に占める割合%	75	87	82	86

仕との関わりで、どの程度のレベルや範囲において具体的な対策が構じられているかを分析することは必要である。また最近の個々の建て替えによる新館、増築館が何故に工事に着工したかを既存図書館の竣工年との絡みで追跡調査をおこない、相関関係の有無を検討すると同時に、建築（立て替え、増築）に至った決定的な要因を調査する必要がある。これは単なる建築の年代別調査のみならず改善措置としての新館、増築の果たす役割やその要因をも調査することであるが、これは次回の報告としたい。

3. 図書館に対する期待と現実との乖離

教育・研究支援機関としての図書館の役割が単に学内の奉仕機関として留まっていた時代ならば問題は単純であるが、現代にあっては学問体系の複雑化・学際化、深化するなかで地域社会に対しても世界に対しても目を向けなければならない状況が進行しつつある。これは館独自の問題に終始しえていた時代からナショナルな視点、グローバルな視点でもって対処する時代を迎えていることを意味しており、このことは文献情報等の流通の促進および流通体制の整備、情報の生産及び国内外への流通とアクセス権の確保という命題に対しても応えていかなければならないのである。科学技術会議は諮問第18号答申を、学術審議会は答申「21世紀を展望した学術研究の総合的推進方策について」を決定している。更に日本学術会議も一連の要望、勧告、提言によって学術情報の収集、流通のための基盤整備の確立を図書館や情報センターなどの学術情報機関に要望、要請している。現実の厳しい実態が存在する一方で、上記のとおり今後ますます図書館への熱い期待が増してくるといふ側面があり、ここに大きな乖離が認められる。そのための一定の打開策を建築面にも求めていかなければならない。

4. 増築への期待

図書館スペースの拡大策として今後注目すべきことは、建て替えによる新館建設よりもむしろ増築による方が有望であろう。一般に言えば、増築は既存図書館の周辺に一定部分の建設スペースがあれば十分可能であり、建築期間・費用コストも新館建設に比べて少なく済み、建設期間中も殆ど利用者に支障を来さないで運営が可能であるという利便性がある。さらに、増築に併せて既存図書館の改装をすれば、非常にリフレッシュな魅力的な図書館ができあがるであろう。もっとも、そのためには既存図書館が一定の機能を維持し続けることが可能であるという前提のもとでなければならないことは言うまでもないことである。利用者サービスとの対費用コストやランニングコストも念頭に入れておくべきであろう。上記の理由により、今後の図書館スペース拡大策は新館よりも、増築にもっと焦点を当てるべきである。ただ、増築の場合にも大学執行部に対する説得力が試されることは言うまでもないことである。

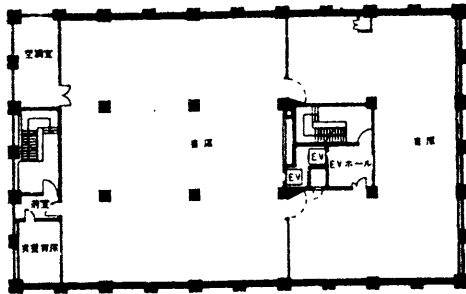
5. 本学深草図書館の増築

筆者は本誌68号にて「龍谷大学深草図書館における書庫問題」として、現状、原因、対策、増築に伴う委員会活動の発足について報告をおこなった。その後、学内情勢の変化のなかで結果として増築が大学執行部により了解され、1年余りの工事期間を経て本年4月より利用を開始したので、その間の報告をしておく。1991年7月の着工に至るまでに、概ね次のような決定がなされた。建築計画にあたっては、書庫スペースの大幅確保を旨としながらも、研究図書館機能の強化、既存図書館の施設・設備の充実をも考慮し、大学執行部の要望を入れて個人研究室を併設したことである。建築方針は次の通りである。
 ①増築する図書館・研究室棟は深草学舎における総合図書館として位置づけ、ハイグレードの学習及び研究施設として、また情報発信基地としての役割を担うこと。
 ②既存図書館および別棟（紫英館）との連絡が容易であり、更に将来西側に増築が可能のように現図書館北側に設計する。
 ③建物は地下1階、地上4階建てとする。1階は学生用の閲覧室を設け、閲覧席の不足に対応するものであり、明るく快適な雰囲気をもたせる。2階は新着雑誌室、3階および地下は書庫スペースとして（下段固定、上段移動式）約95万冊の収蔵を可能とする。4階は研究室、会議室、協同研究室パソコン室などとする。
 ④教員は閉館後においても別棟（紫英館）より自由に図書館（1部分）に出入りでき、常に利用可能な状態とする。

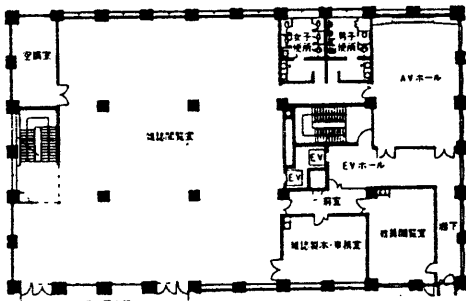
6. 深草図書館増築スペースの概要と機能

上記の建築設計計画・主旨にもとづいて、昨年12月までの工事によって、既存図書館の北側に図書館・研究室棟が完成したのである。資料の再配置、電算によるシステム化なども実施され3館ネットワーク、OPACの実施、業務分担の変更も加わって、4月から新たな体制のもとで運営している。この結果、当初の予想をはるかに越える蔵書の増加と臨時定員増に伴う閲覧席不足の解消のため、座席数は従来の550席から1040席に書庫スペースも大幅な増加が可能となり、当初の主たる目的を成し遂げることができた。また、既存の利用スペースについても改装し、図書館サービスの充実をはかることができた。

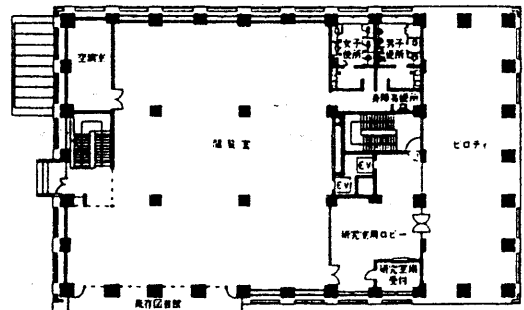
新棟は機能面から階ごとに区分され、地階は書庫（現在は未利用）、1・2階は閲覧室3・中3階は書庫、4階は研究室となった。延床面積は約5690㎡である。詳細は本学から発行されているパンフレットによって各階の平面図および詳細データを掲載しておくので、参考にされたい。



3階平面図



2階平面図



1階平面図

建物概要

規模	地下1階地上4階
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造
軒高	18.94m
最高部高さ	26.14m
建築面積	1,065.62㎡(322.3坪)
延床面積	5,689.21㎡(1,721.0坪)
地階	1,030.00㎡(311.5坪)
中地階	158.44㎡(47.9坪)
1階	1,058.69㎡(320.3坪)
2階	1,132.61㎡(342.6坪)
3階	1,006.30㎡(304.4坪)
中3階	276.89㎡(83.8坪)
4階	962.23㎡(291.1坪)
塔屋	64.05㎡(19.4坪)

主要用途

地階中地階	書庫、設備機械室、電気室
1階	研究室用ロビー、閲覧室
2階	雑誌閲覧室、教員閲覧室、AVホール
3階中3階	書庫、貴重書庫
4階	研究室、共同研究室、会議室

7. おわりに

利用に供して5ヶ月、筆者は一図書館利用者として増築による新たな図書館を常日頃利用しているが、図書館職員ではないので、建築に至った経過についての満足な報告はしなかったし控えさせて頂いた面もあるが、その不足分は実際に見学して補って頂きたい。自館との比較や図書館界の動向のなかで捉えることは自館の活動レベルを推し量る意味において重要であると信じる。キャンパスの中での配置や外部（構造）はともかくとしても実際の内部とくに利用に際しての職員・研究者・学生・業者の動線、サインシステム、家具の選定や配置、書庫の間隔・高さ、カウンター（機能）、人員配置、採光、空調設備、非常設備、OPACの配置などを、また本館が3館のなかの1館として位置づけられていることや書庫が2箇所、利用者カウンターは3箇所に分離・分散されている面もあり、ソフト的要因である図書館機能や連絡・連携・調整との関係で特化しており、この面から

も見学することは重要であると信じる。

増築は図書館改善のための方策として立て替えによる新館建設に比してある意味において部分的対策であるかもしれないし、図書館界において目立ち難い性格を有している。また、既存部分とのソフト・ハード面での結合をいかにするかという困難な問題、まして思わぬ制約が突如として出てくることも想定しておかなければならないと考える。これまで図書館はその設立基盤である大学の建学精神、教学理念に沿って綿々と資料を収集し利用に供してきたが、増築にあたってはその方針を堅持しながら、将来に向かっての新たなステップとすべき第一歩にすべきであるとする。図書館は新館であれ、増築であれ、フィロソフィーを貫徹するものがなければならないと考える。その面では「図書館思想の具現化」である。増築は図書館界のトレンドであり、今後無視できない存在になってくると考える。たとえ増築方法、手法が各大学によって異なるうとも、増築の先例として良きにつけ悪きにつけ他館から学ぶところがあると信じる。また、図書館政策づくりのひとつとして増築を位置づけるに当たっては、常日頃より図書館の本質まで突っ込んだ議論がなされていなければならないし、自主的・民主的な自己分析・評価を介して政策提起できる館員の力量を付けておかねばならないと考える。

京都支部事務局体制決まる

【支部長】	篠原俊夫 (京都大学法学部図書室)
【副支部長】	堤 豪範 (京都大学数理解析研究所)
【事務局長】	松原 修 (立命館大学図書館)
【事務局次長】	竹本文夫 (同志社大学人文科学研究所)
【事務局員】	小島沙織 (京都大学教育学部図書室)
【支部報担当】	〔編集長〕 小林倫道 (京都橘女子大学図書館)
	〔副編集長〕 堤 豪範
	〔企画担当〕 大館和郎 (京都学園大学図書館)
【組織担当】	大館和郎
【会計担当】	吉井紀子 (京都大学薬学部図書室)
【会計監査】	末益尚文 (京都大学医学部図書館)
	竹村 心 (京都大学教育学部図書室)
【全国委員】	竹本文夫

◆◆◆ 大図研大学「情報管理論」開催場所変更のお知らせ ◆◆◆

参加申込を頂いた方々には葉書で別途お知らせいたしましたが、大図研大学「情報管理論」、申込者多数のため下記の教室に場所を変更しました。日程はそのままです。

なお、烏丸通りの西門は閉まっています。今出川通りの正門よりお入り下さい。正門は御所の今出川ご門向かい、相國寺に向かって左側にあります。

同志社大学「至誠館」 S 3 3 番教室 (3階)

に変更